

カキにおける樹幹害虫 (ヒメコスカシバ、フタモンマダラメイガ) の防除対策

1. 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

カキでは樹幹害虫（ヒメコスカシバ、フタモンマダラメイガ）による被害が問題となっているが、卓効を示す対策がないことから、その対策の確立を求められている。

そこで、ヒメコスカシバ、フタモンマダラメイガ幼虫による被害状況を確認するとともに、樹幹害虫に対するガットサイドS、フェニックスフロアブルの効果を検討した。

(2) 情報・成果の要約

- 1) ヒメコスカシバ幼虫は7、8月、フタモンマダラメイガ幼虫は6、9、10月に多くなるため、加害種を把握するためには複数時期の調査が必要である。
- 2) ガットサイドS 1.5倍液及びフェニックスフロアブル200倍液を5月に処理した場合、2～3か月程度、効果の持続性が期待できる。
- 3) カキ樹幹害虫の対策として、5月にガットサイドS 1.5倍液またはフェニックスフロアブル200倍液を樹幹部に処理し、7月にガットサイドS 1.5倍液を同様に処理する体系の効果は高い。

2. 試験成果の概要

- (1) 慣行防除体系下において‘富有’、59年生（2012年時点）を用い、樹幹処理剤処理区（以下、試験区とする）、樹幹処理剤無処理区（以下、無処理区とする）を設け、処理前（5月）から10月まで毎月1回、虫糞か所数と虫数を種類別に計数した。また、調査毎に虫糞及び幼虫は除去した。
- (2) 被害部位で確認される幼虫種は、7、8月はヒメコスカシバ、6、9、10月はフタモンマダラメイガが多い傾向であった（図1、2）。
- (3) 5月にガットサイドS 1.5倍液を処理した場合、処理3か月後から虫糞か所数が増加した。また、5月にフェニックスフロアブル200倍液を処理した場合、処理1か月後～3か月後の虫糞か所数は少なく、処理4か月後からそれが増加した。（図3）
- (4) 表1に示した試験区毎に調査期間中の虫糞か所数を累計し、無処理区のそれと比較すると、II及びIV区の総虫糞か所数が少なく、効果が高いと考えられた（図4）。

表1 樹幹剤処理区の概要

| 試験区 | 試験年度 | 処理時期及び樹幹処理剤 | |
|-----|-------|------------------|--------------|
| | | 5月 | 7月 |
| I | 2012年 | ガットサイドS1.5倍液 | — |
| II | 2014年 | ガットサイドS1.5倍液 | ガットサイドS1.5倍液 |
| III | 2014年 | フェニックスフロアブル200倍液 | — |
| IV | 2014年 | フェニックスフロアブル200倍液 | ガットサイドS1.5倍液 |



ヒメコスカシバ フタモンマダラメイガ

図1 カキの樹幹害虫（幼虫）

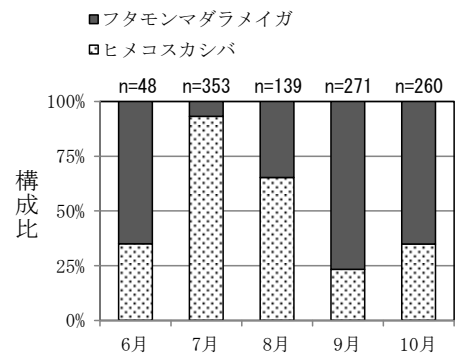


図2 被害部位で確認される幼虫種の時期別構成比の推移 (2012~2014年平均)

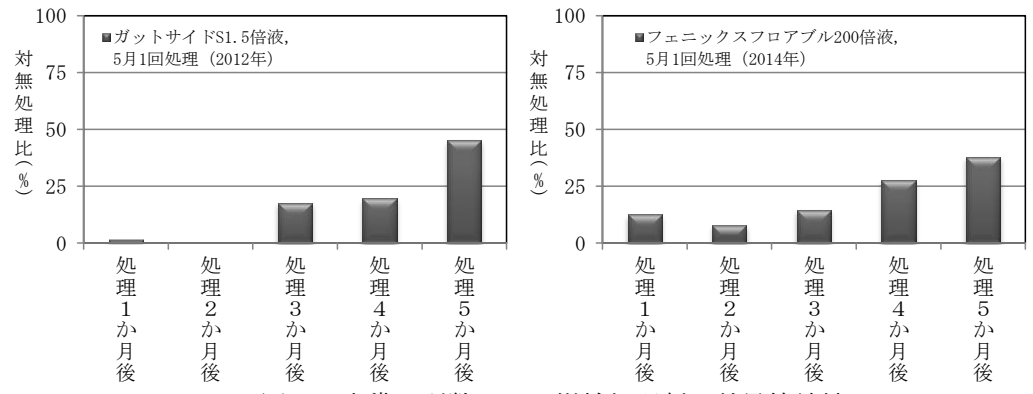


図3 虫糞か所数でみる樹幹処理剤の効果持続性
 対無処理比 = (各処理区虫糞か所数 / 無処理区虫糞か所数) × 100

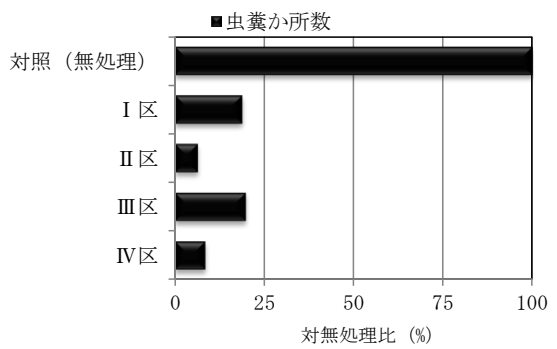


図4 虫糞か所数でみる樹幹処理の効果 (処理1~5か月後累計)
 対無処理比 = (各処理区総虫糞か所数 / 無処理区総虫糞か所数) × 100

3. 利用上の留意点

- (1) 試験開始年度の休眠期にバークストリッパーを用い、粗皮削りを実施したほ場での検討結果である。
- (2) フェニックスフロアブル200倍液の使用基準は、使用時期は開花期まで、使用回数は樹幹散布については1回まで(2015年6月末現在)である。

4. 試験担当者

(環境研究室 主任研究員 中田 健
 河原試験地 地 長 小谷 和朗*
 環境研究室 室 長 田中 篤)

*現、中部総合事務所農林局倉吉農業改良普及所 普及主幹